

2021年1月31日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 14 章 25～31 節

説教題：神との交わりをもって

「百万人の福音」に「聖霊とからだ」という記事がありました。ある牧師先生が、病院で体の中に黄色ブドウ球菌が確認されて入院治療を行いました。その菌が入ったのは、10年前に受けた手術の時だったのだそうです。黄色ブドウ球菌という危険な菌が、10年間も首全体に広がっていたにも拘わらず、熱も出ず、痛みもなく、体調は悪くならず、お医者さんは「考えられない」と言ったそうです。牧師先生は、それから抗生物質を飲み続けておられるのですが、クリスチャンのお医者さんは、会うたびに「守られていますね」と言って下さるそうです。なぜ健康が保たれているのか。牧師先生は「聖霊によって守られている」と推論して、今、聖書の御言葉を手掛かりに「聖霊によって体が守られている」という推論を検証している途中だと言うことでした。聖霊の働きについて検証しようとする姿、その基にあるのは、聖霊の働きへの信頼だと思います。私達も、聖霊の働きについて、普段に考え、信頼し、求めても良いのではないかと思います。

イエス様の「別れの説教」が続きます。前回の箇所でイエス様は弟子達に「神との交わりを生きることができるようになる」と語られました。今日の箇所では、その神との交わりを具体的に導くものについて語られます。「新共同訳聖書」は4章15節から31節に「聖霊を与える約束」という小見出しをつけています。その通り、私達と神様との交わりを具体的に導いて下さるのは聖霊です。この箇所は、聖霊というキーワードを使うとメッセージが見えて来ます。聖霊は私達に何をして下さるのか、そのことを中心に学びましょう。2つのことを申し上げます。

1：聖霊の恵み

26節に「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」(26)とあります。弟子達はイエス様から様々な教えを受けました。しかし、弟子達がそれを理解していたかという、そうではなかったと思います。十字架の前のイエス様と弟子達の会話は、ちぐはぐです。イエスは、ご自分が十字架のお架かりになって、そして復活することも弟子達に話しておられましたが、弟子達はそのことも信じていなかったし、分からなかったのです。しかしペンテコステ(聖霊降臨)の後、弟子達は人々に、イエス様について、イエス様のもたらして下さった救いについて明確に語り、人々に悔い改めを勧めました。大祭司達にイエスの御名によって語ることを禁じられても、堂々と語り続けました。どうして変わったのか。それが聖霊の働きなのです。弟子達は、聖霊によってイエス様の語られたこと、為された業を思い起こし、その真意が分かり、強められ、イエス様の話を、イエス様の救いを語ったのです。だからこそ「新約聖書」も生まれて来るのです。今もそうです。聖霊が私達にイエス様の言葉を思い起こさせ、その語られた意味を、またその深いメッセージを、悟らせて下さるのです。

榊原寛という先生は、6歳のご次男を交通事故で天に送られるのです。奥様が「もう一生笑う

ことはないかも知れない」と言われるくらい、ご家族は嘆き悲しんだのです。しかしその先生を励まし、立ち上がらせて行ったのは、イエス様の言葉だったのです。ゲッセマネの園でイエスは言われました。「わたしは悲しみにあまり死ぬほどです」(マタイ 26:38)。この個所を通して聖霊が先生に語られたのです。こう言うておられます。「悲しみの人で病を知っておられるイエス様は、私達家族の悲しみをしっかり受け止めて下さったと感じた」。それだけではない。長い苦しみを通られたと思いますが、しかし先生ご家族は「死んだ息子の分まで生きていこう。息子の分まで主のお役に立てて頂こう」、そういう祈りをするようになられるのです。聖霊の働きではないでしょうか。イエスの言葉を通して聖霊が語って下さる時、私達もイエス様の御言葉の深い恵みに気づくのです。

さて、聖霊の恵み、働きは、それだけではありません。27 節「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」(27)。「平安を与える」と言われます。その平安は「世が与える平安とは違う」と言われます。世が与える平安は、おそらく状況による平安だと思います。身体の状態が良かったり、生活が安寧であったり、人間関係が上手く行っていたり、経済的に落ち着いていたり、そういうものがもたらす平安ではないでしょうか。それはそれで大切なこと、素晴らしいことです。しかしそれは、いつも、いつも与えられるものではないでしょう。私達の生活には色々なことがあります。皆さんも今、色々な重荷を抱えておられることでしょう。子供の頃に見たテレビのコマーシャルを思い出します。お猿さんが気持ちよさそうに温泉に入っていて、ナレーションが「何にも心配がない」と入るのです。私は「いいな…」と思ったものです。しかし私達の現実の状況は決して平安を与えません。何かかにか、心配があります。

しかし、イエス様の下さる平安は違うのです。状況を越える平安です。使徒パウロの書いた「ピリピ人への手紙」は「喜びの手紙」と呼ばれます。「喜びなさい、喜びなさい」とパウロは勧めます。そしてこう語ります。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知って頂きなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます」(ピリピ 4:6~7)。パウロ自身が平安を経験していたからこそ語り得た言葉です。しかしパウロはこの手紙をどこで書いたのか。牢獄の中で、もしかしたら処刑されるかも知れない、という状況で書いたのです。平安等と言える状況ではなかったのです。しかし、その中で彼は平安を得ていました。なぜでしょうか。1つには、彼はイエス様の十字架によって一切の罪を赦され、永遠の命に与る者とされたという、その救いの現実の中に生きていたからだだと思います。死を越える救いの恵みに支えられていたのです。しかしそれ以上に、聖霊を通して臨在されるイエス様と共に生きていたからだと思うのです。イエス様は、聖霊を通して「あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」(27)と語られたのです。「わたしは…あなたがたのところに来る」(28)と語られたのです。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの

神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ 41:10)と語られる神様、イエス様と、パウロは共にいたのです。だから平安だったのです。ある姉妹が話して下さいました。お兄さんが交通事故で寝たきりになられました。ご家族にとって、特にお母さんにとって大変な状況でした。10年後に快復が始まるのですが、そうなった時にお母さんが言われたそうです。「10年間、この子はきっと良くなるという希望が与えられ続けた(語りかけを受けた)。そうでなければやって来られなかった。私は神様に会っていた」。状況が与えるものとは違う、イエス様が与えて下さる希望です、平安です。聖霊は、私達にも、神のご臨在、イエスのご臨在を経験させて下さるのです。

イエス様は28節で「あなたがたは、もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜ばずです。父はわたしよりも偉大な方だからです」(28)と言われます。それは、世において救いの業を為し遂げ、父なる神様の許に帰るのが、イエス様のゴールであり、目的だったからですが、それだけでなく、弟子達が喜べるのは、イエス様が父なる神様の御許に帰られる時、イエス様を通して父なる神様から聖霊が彼らのところに、私達のところに、送られてくるからです。偉大な父なる神が聖霊を送って下さるのです。いずれにしても、聖霊の恵み、働きによって、私達は導かれて行くのです。

2: 聖霊と生きる

適用について短くお話しします。聖霊が私達を支え、信仰生活を支えて下さるのであれば、私達は聖霊の恵みを、働きを豊かに受けて、信仰生活を力強いものにして行きたいと願います。どうすれば良いでしょうか。

私達は、日曜日に礼拝に集い—(今は家庭礼拝ですが)—神の前に出ます。どこで捧げるにしろ、礼拝を捧げることは、聖霊の働きを受けることなのです。皆さんも、礼拝を通して神に触れられる経験を為さるのではないのでしょうか。私は先日の家庭礼拝で「全てを神に委ねなさい」と語りかけを受けました。いや、何かを感じる、感じないということではなく、それを越えて私達は、礼拝の中で聖霊の働きを受けるのです。だから礼拝は大切なのです。そして同じように大切なのが、普段に祈ることです。祈ることによって、神は不思議な平安を与えて下さるのです。

Yさんというお母さんの証しを読みました。お子さんが不登校になって、長い間、苦しみ、格闘されたのです。お子さんは、小学校1年生の5月から学校に行かなくなりました。まだ不登校が珍しかった頃です。Yさんはパニックに陥ります。親戚の人等が心配して訪ねて来るのですが、親戚が来る度に問題が複雑になって行くのだそうです。「ノイローゼ状態になり、不安と絶望の高ぶりの中で、子供と一緒に死ねたらどんなに楽になるだろうかと考えた」と書いておられます。Yさんは「何とか子供を学校に行かせなければ」と思って子供と格闘をするのです。でも、そのなりふり構わない子供とのやり取りの中で見えて来たのは、自分の内側からあふれ出て来る自分の罪性だったのです。ある人の影響ですがるような思いで教会に行きます。教会に言わず納得したのは「自分が罪人である」ということでした。しかしその自分を、一言も責めることも、

非難することもしないで受け入れて下さる神様を感じるのです。そして祈るのです。祈りを通して少しずつ平安を得るのです。「自分の罪のせいで子供は…」と思っていた彼女に、イエス様が語られました。「『先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか…』…『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです』」(ヨハネ 9:2~3)。自分を責める思いが暖かく、軟らかく砕かれて行く、解放を経験して行くのです。罪ある自分を受け入れて下さる神様を深く知って行く中で、委ねることも経験して行きます。そうすると、委ねるところから将来への希望が与えられ、これまでにない考えが与えられ、別の関り方が与えられて行ったのです。実はこの証しは「長い間、苦しみましたけど、子供も学校に行くようになりました」という証しではないのです。「依然として不登校は続いています」という証しです。その状況で、なぜ書くことが出来たのか。それは、Yさんが神様の平安に包まれているという何よりの証拠ではないかと思うのです。Yさんはこう結んでいます。「それぞれの人生は、すべて神のご支配のゆえに意味のあるものであり、そうして、過去の全てを肯定する時、平安があり、喜びと感謝があり、将来に希望が持てます」。イエス様が与える平安は、状況に支配される平安ではない、逆に状況に働きかけて行く平安なのです。

イエス様は言われました。「この世を支配する者…はわたしに対して何もすることはできません」(30)。私達も聖霊の働きを受ける時、サタンは私達に近づくことは出来ても、私達を打ちのめすことは出来ないのです。最後にイエス様は言われました。「立ちなさい。さあ、ここから行くのです」(31)。私達も、礼拝(家庭礼拝)を通して、祈りを通して、聖霊の働きを新しく受け、新しい1週間の歩みに出て行きましょう。問題はあります。だから不安や恐れがあります。しかし、聖霊が共にいて下さいます。